

JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 53 回 日本語教育方法研究会
福島大学 (福島県福島市)
2019 年 9 月 14 日 (土)

9 月 14 日に福島大学で第 53 回研究会を開催いたします。今回も昼食交流会を企画しました。会場で昼食をとりながら、自由に楽しく意見交換をしていただければと思います。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 河野俊之

TABLE 1 第 53 回研究会開催について

日 時 :	2019 年 9 月 14 日 (土)
会 場 :	福島大学
開催委員 :	中川祐治 (福島大学) 中川健司 (事務局: 横浜国立大学)

TABLE 2 開催スケジュール

	午前	午後
9:25	受付 (発表者・一般) ポスター貼付	1:45 昼食交流会終了
10:10	開会の挨拶	2:00 総会
10:15	会の進め方の説明	2:30 口頭発表開始
10:20	口頭発表開始	3:25 ポスターセッション開始
11:15	ポスターセッション開始	4:55 ポスターセッション終了
12:45	ポスターセッション終了 午後のポスター貼付	5:00 講評・JLEM 賞発表
12:50	昼食交流会開始	次回開催委員挨拶 閉会の挨拶 参加者全員で片付け

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予定の方は、事前の会費納入 (p.11 参照) にご協力ください。

新規入会: 3,000 円 (年会費)

当日のみ参加: 2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 外国人社員向け企業内日本語研修の実践報告—外食業企業の例—

松尾仁美（國學院大學大学院生）

外国人材の受入が進み、日本社会において外国人労働者は欠かせない存在になった。本研究では、筆者が勤める外食業企業における非日本語母語話者社員対象の日本語研修の実例から、企業における日本語教育の方略の提案を行う。当該企業では、従来母語の区別なく研修を行っていたが、新たに外国人社員のみを対象とした日本語習得に特化した研修を実施した。その結果、外国人社員の日本語運用能力向上に成果が得られた。また「積み上げ式でなく一回完結のものにする」「職務、実体験に即したものを使い教材として扱う」「専門用語より汎用性の高い語彙の導入をする」等の使用する教材や研修の形態・内容を考える際の留意点の提案を行う。

2. 台湾人学習者は意見文に資料をどう用いたか—文章作成後のインタビューから—

楊明翰（東北大学大学院生）・菅谷奈津恵（東北大学）

本発表では台湾人上級学習者4名を対象とし、意見文での読解資料の使われ方について調査を行った。学習者には、立場の異なる投書文を2つ読み、その両方またはどちらかの内容を取り込んで意見文を作成するように指示をした。文章作成後にインタビューを行い、どちらの投書文のどの部分を取り込んだか、その部分を選択した理由は何か等を尋ねた。インタビューでの回答と産出された意見文の分析を踏まえて、読みと書きを統合した作文の指導法について検討する。

3. 職場における日本語母語話者と非日本語母語話者とのコミュニケーション—アンケートによる調査報告—

宇城かおり（恵泉女子大学大学院生）

非日本語母語話者が日本で働く際、日本語母語話者とのコミュニケーションにおいて誤解が生じ、非日本語母語話者のみならず日本語母語話者も困惑しているという現状がある。お互い気持ちよく、協力して働くことができる職場や社会にするためには、双方にとって円滑なコミュニケーションが必要である。そのためには非日本語母語話者だけが職場や日本社会に合わせることを求められるのではなく、日本語母語話者の歩み寄りも大切である。そのような現況にはどのような問題が存在するのかをアンケート調査により、分析・考察を行い、双方にとって円滑なコミュニケーションを実現するにはどうしたらよいのかを考える。

4. 「書く」活動は発話の産出にどう反映するか—発話量と語彙の広がり度の計量的分析—

村田裕美子（ミュンヘン大学）

本研究は、ドイツ国内の大学に通う初級から中級レベルの学習者32名を対象に、同じ課題で「話す」活動を2回行ったとき、1回目と2回目の間に同じ課題の「書く」活動があるグループ（A）とないグループ（B）で2回の発話の量と内容がどのように変化するかを計量的に分析したものである。分析の結果、AはBよりも語が増加し、内容が変化することが明らかになり、作文を書いたという経験が、発話量を増やし、身近な内容から抽象的な内容へと変化させることができた。本研究をふまえ、日本語教育の現場へは、「書く」と「話す」を連携した活動が、総合的な産出能力の向上につながることを示す。

5. 敬語学習の大切さと大変さの狭間にいる学習者—「完璧」を求める学習者の事例分析—

徳間晴美（明治学院大学）

本発表では、敬語学習の「大切さ」を十分理解しながらも、対人的な考え方の違いなどから、敬語を理解し使用する「大変さ」も痛感した1名の中級日本語学習者の姿を描く。「敬語が完璧になりたいと思わない」という気持ちに至った学習者は、どのような経験で何を感じてきたのか、成功経験と失敗経験のエピソードを切り口に、学習者の敬語学習への向き合い方の形成過程を質的に分析する。そこから、敬語学習が持つ意味や価値とは、目標レベルの高さで測るものではなく、学習者一人ひとりが人としてどうありたいかという思いに照らしながら敬語を考え、日本語でのコミュニケーション実践を充実化させることだという考えを示す。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 19 件）

6. ワークショップの要素を取り入れた模擬授業活動—日本語教員養成課程の授業実践から—

作田奈苗・山本博子（東洋学園大学）

本発表は、学生による模擬授業を、ワークショップの要素を取り入れて行った、日本語教員養成課程の授業の実践報告である。模擬授業は教員役の学生が一人ずつ教壇に立って行うのが一般的だが、この方法では一人当たりの実施回数が少なく、学習者役の学生も当事者意識が低くなりがちである。そこで、本実践では、小グループで模擬授業を行うことで参加者の当事者意識を高めること、また、経験を共有することから自分たちで気づき、学んでいくようにすることなど、ワークショップ・デザインの考え方を取り入れて授業活動を行った。この結果、学生は、観察や相互交流、ふりかえりなどを通して、社会構成主義的に学んでいく姿が見られた。

7. 中国人家習者の促音の誤用についての一考察 —コーパス I-JAS を用いて—

平田秀（国立国語研究所）

本研究では、国立国語研究所が構築したコーパス「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）」を使用し、中国語を母語とする日本語学習者の促音の誤用について考察する。促音の誤用については、以下の 2 パターンが観察された：1. 促音の脱落（ピクニック→ピクニク）、2. 促音の長音・撥音への転換（バスケット→バスケート、サンドイッチ→サンドインチ）。I-JAS には各学習者の J-CAT の得点の情報も付与されており、J-CAT で 250 点以上を取得した上級学習者においても前述の誤用がみられた。このことから、促音の指導について特別の配慮が必要であることを指摘する。

8. ビジネス日本語教科書における電話関連事項の扱いと工夫 —「クレーム」を中心に—

饗場淳子（東京外国語大学）・作田奈苗（東京外国語大学）・寅丸真澄（早稲田大学）

近年、ビジネスでは事務連絡はメールで済ませることも多いが、謝罪など繊細な配慮が必要な場面では電話の役割は大きい。このような場面の一つ「クレーム」を取り上げ、ビジネス日本語教科書の電話に関する事項の中で「クレーム」を扱う部分の特徴を調査したところ、クレーム対応の際の留意点についての知識を補い、円滑なコミュニケーションを助ける留意事項や実際のビジネス場面を反映させた会話や対応全体の流れの提示等の工夫が見られた。今後、電話とメール等との使い分けが進むことも予想される。教科書でも「電話が活用される場面」を重点的に扱う必要性が増すことも考えられ、その際、このような「工夫」も充実させていくことになる。

9. 外国人との初対面会話から 1 年後の変化—日本人学生 A へのインタビューから—

渡辺民江・上田美紀（中部大学）

外国人との接触経験がほとんどない日本人学生 A が、留学生と初めて会話をした初対面会話を録画した。会話がうまく続かなかった場面を、A がどのように解釈していたか、録画データを見ながら A と共に探った。その結果、A は留学生の日本語力の誤りにはほとんど気づいておらず、話題の適切さ、自らの説明不足、留学生との人間関係に注目していたことがわかった。A はその後 1 年間、留学生との定期的な会話活動を続けた。初対面会話から 1 年後、A に半構造化インタビューを行った。それにより、A 自身が自らの変化についてどのように認識しているか、1 年間の経験を経てどのような気づきがあったのかが明らかになった。

10. ビジネス日本語教育における異種複数機関との連携

中川健司（横浜国立大学）・鈴木綾乃（横浜市立大学）・徳田淳子（東京中央日本語学院）・淺海一郎（内定ブリッジ株式会社）

ヨコハマ・カナガワ留学生就職促進プログラムは、横浜国立大学が横浜市立大学、横浜市、神奈川県等と連携して運営している文部科学省委託事業で、キャリア教育・ビジネス日本語教育・インターンシップという 3 本の柱がある。プログラム全体で、留学生就職支援に向けた異種複数機関との連携が行われているが、それはビジネス日本語に関しても同様である。本発表では、同プログラムのビジネス日本語教育における、日本語学校（動画作成、学習者調査）、NPO 法人（連携授業実施）、企業（アプリ開発のための実証実験、学習者調査）といった異種複数機関との連携について報告するものである。

11. 「日本事情」における Moodle および Google Classroom の導入方法—日本語人材を目指すタイ人日本語学習者を対象に—

吉嶺加奈子（九州大学）

本研究では、タイの大学日本語課程で開講される「日本事情」において、卒業後に日本語人材となることを目指すタイ人日本語学習者に対して、自作電子コンテンツを Moodle および Google Classroom で使用する反転授業形式の授業実践を行った。タイ人日本語学習者に対する受講後インタビューのうち、e ラーニングに関する回答、特に Moodle と Google Classroom に言及した回答から、タイ人日本語学習者はスマートフォンからアクセスすることから、e ラーニングに対してはコンテンツの内容よりも「ユーザビリティ」を重視していることが明らかとなった。これを踏まえ、「日本事情」において学習意欲を持続させるための Moodle および Google Classroom の導入方法を論じる。

12. 中級レベルの総合教科書を用いた授業設計について

内丸裕佳子・富岡史子・本田雅美（岡山大学）

中級レベルの短期交換留学生、大学院生、研究生を対象とした岡山大学の総合クラスでは『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 82 中級中期』を用いて週 4 日 8 時間の授業を行っている。文法、語彙が重視されがちだった従来のシラバスを見直し、今年度から CEFR と CLIL を参考に、言語運用力を高めるための授業設計について検討と実践を重ねている。新シラバスの特徴は、各課のテーマに関連する生教材を取り入れ、内容理解を深めながら自身の見解を日本語で産出できるように各課に目標とタスクを明示した点にある。本発表では各課の目標とタスクの設定、授業の流れ、発問、補助教材作成、評価に関する今年度前期の実践を紹介し、今後の課題について述べる。

13. 国際イベントと日本語、日本語教育—東京五輪、パラリンピックそれ以降のビッグイベントと日本語、日本語教育—

清水泰生（京都陸上競技協会）

東京五輪パラリンピックが迫っている。日本語界も東京五輪パラリンピックに注目しているが、東京五輪パラリンピック後の国際イベントのことも重要であろう。例えば、会期が 6 か月もある 2025 年大阪万覧、参加者が五輪の 2.5 倍も予想されるワールドマスターズゲームズ 2021 関西と 2026 年アジア大会（愛知）、毎年外国人参加者が 6000 人くらいある世界六大マラソン東京マラソン等である。本発表において、東京五輪パラリンピック以降のイベントをも考えて今後のスポーツを中心とした国際イベントと日本語、日本語教育について考えてみたい。

14. 対話的評価活動を通じたスピーチ改善の試み

近藤行人（名古屋外国語大学）・田中典子（名古屋大学）

本発表では、対話的評価活動によるスピーチ改善活動を試みた実践について報告する。この実践で学習者は発表したスピーチを評価するための評価観点および、パフォーマンスの特徴やレベルをどのように記述するのかについてクラスで話し合った。この話し合いの結果をまとめ、クラスにおけるスピーチの評価基準を作成した。作成した評価基準を用いた自己評価、他者評価を行ったうえで、再度自身のスピーチを見直し、改善した。学習者は評価基準を共同構築する中で、スピーチ改善の必要性に応じた評価観点の具体化や、スピーチのパフォーマンスを把握するための基準の言語化を行っていた。

15. 学習者が場面把握できる日本語教育を目指して—社会とつながるためにできること：「テイル」の観点から—

佐藤明子・林千賀（城西国際大学）

本研究は、学習者が適切な場面で言語形式が使用できるようになる方法を探る。本調査では、日本語母語話者から継続動詞の「～ている」の使用実態調査を実施し、談話の中でどのように「～ている」が使用されているのか検討した。その結果、「～ている」の使用は、「人を探している時の返答」、「誘いの前置き」、「談話継続のためのストラテジー」などの機能があることが明らかになり、これらの機能は、ほとんどの教科書では言及されていないことがわかった。本発表では、使用実態調査と教科書分析のもと、どのように日本語教育に応用すべきか、「～ている」の教室活動を具体例で示し、学習者が社会とつながるための示唆を述べることとする。

16. 理科系学部留学生受け入れのための送り出し国の数学カリキュラム評価の試み

佐々木良造（静岡大学）・長谷川貴之（足利大学）

一般的に、日本への理科系学部留学のための予備教育機関の学生は、生活・学修のための日本語を学び、それと並行して日本の高校のカリキュラムを意識した数学・物理・化学などを学んでいる。しかし送り出し国で実施される予備教育のカリキュラムの中には、日本でのカリキュラムとの差異が残っているものがあり、予備教育の期間内で不足項目を効率よく補う必要がある。本発表では、理科系基幹教科である数学のカリキュラムを取り上げる。特に、マレーシアの予備教育機関での数学のカリキュラムを取り上げ、現地の後期中等教育・予備教育から日本の大学教育への円滑な「高大接続」のための数学カリキュラム構築を目指したその評価を試みる。

17. アクセント教育における最初の授業

河野俊之（横浜国立大学）

アクセント教育の最初に扱うこととして、4拍名詞の下がり目を答えたり、「雨-飴」等の2拍語の異同を答えたりする教材が多く見られる。しかし、それらは難しそうたり、すべての語について、そのアクセントを1つひとつ覚えなければならないと誤解させたりする恐れがある。また、動機づけについても問題があると言える。そこで、発表者は、アクセント教育の最初の授業で、日本人の名字を扱った。音声を聞いた後、下がるか下がらないかを答えさせ、次に、型を示した後、型が原則として0)と(-2)の2つしかないことを答えさせた。さらに、他の名字を提示し、産出させた。これにより、推測や訂正の能力が養成されたと思われる。

18. 基本色彩形容詞の意味拡張に関する研究

郭麗（東北大学大学院生）

本研究は日本語の基本色彩形容詞を取り上げ、同じ色を表す外来語と和語の差異を明らかにしたい。次の課題を設定した。①外来語と和語の色彩形容詞は名詞を修飾する時、それぞれの名詞はどのような特徴が見られるかを考察する。②色彩語は抽象物を修飾する時、肯定的なイメージあるいは否定的なイメージを表す傾向があるを考察する。研究の方法は現代日本語書き言葉均衡コーパスを分析する。その結果、色彩語が抽象物を修飾する際、よく否定的なイメージが生じる傾向が見られる。

19. 中国人口習者における授受表現の非用実態の調査報告（2）—「てくれる」「てもらう」を中心に—

梁穎穎（拓殖大学大学院生）

これまで、授受表現の誤用については研究が数多く行われてきたが、非用についての研究は少ない。そこで、本研究では中国人口習者を対象に調査を行い、日本語母語話者の使用状態と比較しながら分析することで、どのような条件で授受表現の非用が起きるかを考察した。梁（2019）では授受補助動詞の使用実態を知るためのアンケート調査を行い、「てあげる」を中心に論じた。本研究では同様の方法で、「てあげる」「てくれる」「てもらう」について再調査し、分析を行った。アンケート調査の結果により、授受表現の使用率について、中国人口習者は全体的に日本語母語話者より低く、授受表現の代わりに動詞の辞書形や「ます形」を使用する傾向が見られた。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

20. 短期留学生を対象とした多国籍クラスでの日本語音声教育の取り組み—カンボジア人学生とベトナム人学生の発音改善の気づきとなった実践に着目して—

矢野和歌子・赤木朋子・石河祐子・清水昌子・山本恵美子（公益社団法人国際日本語普及協会）

都内私立大学の留学生を対象とした 15 週間の日本語集中プログラムにおける音声教育の取り組みについて、調査結果と発音改善への気づきとなった実践を報告する。開始時の発音チェックから、カンボジア学生の主な発音の誤用が、「つ」→「す」、「しゃ」→「ぢゃ」、「じょ」→「ぢょ」であり、前回の調査同様、「つ」を「す」に近い音で代用する傾向が顕著であることがわかった。また、調査結果を踏まえて行った教育実践についての記述と修了時の発音チェックの結果から、多国籍クラス内でのピア活動を生かした実践が、学習者の意識を高め、発音改善につながっていることが窺えた。

21. 「話し合ってよかった！」を育むためのディスカッション教材開発—アイデア積み上げ過程を評価するには—

藤浦五月・宇野聖子・桑野幸子（武蔵野大学）

本発表は、議論を深める・アイデアを積み上げるという観点からディスカッションを分析したものである。初年次アカデミック・ジャパニーズクラスの留学生（上級）を対象とした。本実践では充実した話し合いを円滑に行うことの目的とし、意見の述べ方、反論の仕方、過度な一般化を避けた伝え方、提案の仕方、意見の促し方など様々な表現を扱った。表現や手法のバリエーションの増加など一定の効果は得られたものの、意見を深める・アイデアを積み上げるという点で不十分なところが見られた。本発表では、活動の効果と課題を分け、議論の深まりが不足している点については要因とともに報告する。そして要因分析をもとに具体的な改善案を提示したい。

22. ベトナム人のための日本語複合動詞教育

ファム・ティ・タイン・タオ（東京外国語大学大学院生）

日本語の複合動詞は、頻度数の高い「～込む」「～上げる／上がる」「～出す」といった複合動詞が、移動事象から状態変化への意味拡張を起こし、アスペクトを表すという点で特徴的である。ベトナム語にも複合動詞は存在するものの、日本語の複合動詞の形成とは異なる語形成のため、ベトナム語母語日本語学習者には習得が困難で、読解においては意味がよく理解できず、また産出においては、非用をもたらす。本発表では、日本語とベトナム語の両言語間における移動・状態変化を表す複合動詞を比較し、日本語教育における複合動詞教授法を考案する。

23. 読解力の高い日本語学習者はエッセイの論理性をどのように再構築するか

中村かおり（拓殖大学）・向井留実子（東京大学）・近藤裕子（山梨学院大学）

アカデミックな文章は問い合わせに対して客観的な根拠で答える等の論理的な文章だとされる。一方、エッセイは展開や構造が多種多様であるため、筆者の主張とその根拠の読み取りがアカデミックな文章よりも難しい場合がある。本研究では、読解力が高い日本語学習者 3 名を対象に、発話思考法を用いたエッセイの理解プロセス調査と要約文作成課題を行った。その結果、学習者は読みでは原文の読みにくい個所や矛盾を指摘しながらも、要約文では論理的な修正を加えて書き直しており、全体として主張と根拠のつながりに納得できれば、文間の矛盾やねじれを許容していることが示唆された。

24. 発話行為に対する日本語学習者の語用論的認識—中上級学習者を対象とした予備的調査—

堀田智子（東北大学）

本研究は、発話行為（依頼や誘い、断りなど）に対する中上級日本語学習者の語用論的認識と遂行に関わる困難点を探るものである。アンケート調査の結果、学習者は、習熟度を問わず、対人配慮を示す言語表現（間接表現や待遇表現など）の使用において日本語と母語の間に普遍性を見いだしていることが分かった。また、日本語の語用論的定型表現の使用頻度の高さや多様性、多機能性に言語特異性を認めていた。さらに、言語特異性の認識から、発話行為遂行時に産出と理解の両側面で困難さを感じていることが分かった。本結果は、日本語教育現

場での語用論的指導の重要性を示唆するものである。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 20 件）

25. 「質問づくり」におけるよい話し合いとは—中上級日本語コースでの活動の事例から—

駒田朋子・近藤かをり（南山大学外国人留学生別科）

中上級日本語授業で、発散思考、収束思考、メタ認知思考を使って質問を作成する「質問づくり」を行った。この活動で、個々の学習者が質問を作成した後、3人グループで、作成した質問を共有し、質問の種類を変え、重要だと思う質問を3点選んだ。この活動の話し合いを録音・文字化して観察したところ、メンバーの出した質問に活発にコメントがなされ質問の意図が明確になっていき、具体的な質問が作成されたグループがあった。このグループの話し合いには、フィッツジェラルド（2010）が「コミュニケーション成功の条件」としている「ことばのやりとりでお互いを包含する姿勢」「他の意見を受け入れ、自分の意見を変えられる柔軟性」等が見られた。

26. 母語によるピア・レスポンスの有効性—フィードバックの観点から—

趙超超（東北大学大学院生）

本研究は、中国の大学の日本語作文教育で、ピア・レスポンスにおける使用言語として母語と日本語のどちらの言語のほうがフィードバックによい効果を与えるかを検証することを目的とする。調査では、中国四年制大学の日本語専攻学習者を対象にピア・レスポンス活動を行った。ワークシートに記入されたフィードバックを分析し、フィードバックの数量・内容・タイプと、推敲作文との関連性の2つの面から考察を行い、母語と日本語によるピア・レスポンスの効果を比較した。結果としては、母語使用のほうはフィードバックの具体性、採用率がより高く、推敲成功率の向上に結びついたことがわかった。

27. 日本語教育現場における人間関係の考察—教師の人間性に着目して—

會田篤敬（岩手大学）

本研究は「『日本語教育の現場において良好な人間関係を築くために望まれている教師の人間性』を明らかにすること」を目的として現役日本語教師3名を対象に半構造化面接を行ない、その結果をKJ法で分析した。本結果では、良好な人間関係を築くための日本語教師の人間性を測る基準として、6つのポイント（1. <競争心>、2. <異なる価値観への受容度>、3. <コミュニケーションにおける積極性>、4. <感情のコントロール>、5. <他者批判>、6. <発言への配慮>）が示唆された。また、それぞれのポイントの有無が日本語教師間の人間関係に与える影響も推察することができた。

28. 中国人における経済力と能力に関わる面子意識についての調査

ザン カリン（拓殖大学大学院生）

面子に関する意識は日本人にとっても、中国人にとっても、重要なものである。末田（1998）は中国人の面子意識について、日本人よりもっと個人的で、実利実益に関わり、また、経済力や能力に対する他者からの評価に関連すると述べている。しかし、ザン（2019）では、主に20代の中国人は経済力と能力に関わる面子に対して、気にしないという異なる傾向が見られた。時代の変遷とともに、中国人の若者の考え方も変わってきた可能性があるため、再調査する必要があると考えられる。そこで、本研究では中国の20代の若者を対象として、インタビュー調査を行い、現在中国の若者の経済力と能力に関わる面子意識を明らかにする。

29. 科目の中でのライティング指導の試み—中国人大学院生による書評レポートを中心に—

菅谷奈津恵（東北大学）

本発表では、大学院の外国語教授法科目にて実施したライティング指導の試みを報告する。当科目では言語教育に関するテーマで複数のライティング課題を実施しており、学期末には外国語教科書の書評レポートを課している。中国人留学生2名が提出した書評レポートを分析したところ、学期前半に作成した小レポートに比べ、全体として段落分けや引用表現がより適切になるなどの向上が確認された。しかし、参考文献の選択や引用符の使用においては不適切なものが見られ、困難が生じていることがわかった。

30. 学習者に主体的学習を促す文型の授業—名古屋キャンパス留学生日本語別科の取り組み—

小出寿彦・久野かおる・中林律子・三宅祐司・波村慎太郎・津坂朋宏（東京福祉大学）

本学名古屋キャンパス留学生日本語別科の授業は、文型、読解、聴解、表記、作文、会話、日本事情などである。各授業では、学習者が自律学習の習慣を身につけ、主体的に授業に取り組むことができる教育を実践している。その目標は、学習者が別科修了後も進学先で主体的に学習し、課題を解決できる力を育むことである。各授業で主体的学習を促す展開を行ったところ、学習者が積極的に学習を進めるようになり、文型の授業で使用している教材を他の科目でも自発的に使うなどの効果が見られた。本発表では、自律学習という視点から、文型の授業を取り上げ、その進め方について報告する。

31. コーパス分析システム Co-Chu の作文指導への活用

本間妙（中部大学）・山本裕子（愛知淑徳大学）・川村よし子（東京国際大学）・小森早江子（中部大学）

作文指導において、問題箇所の指摘だけでなく、個人の誤用の傾向やクラス全体に共通する問題を把握することは重要である。筆者らが開発を進めているコーパス分析システム Co-Chu は、取り込むデータに対して、形態素だけでなく文レベルでもメタ情報を付すことができる機能を備えている。この機能を学習者の作文データの分析に活用するための運用実験を行った。実験では自他動詞に着目し、動詞には語単位でタグ付けを行い、助詞や助動詞など付随する要素に関してはコメントの形でメタ情報を付けた。その後、Co-Chu の検索機能を用いることにより、個々の学習者およびクラス全体の自他動詞の使用実態や助詞の誤用の傾向等を一覧で示すことが可能になった。

32. 日本語学習者の SNS のやりとりに現れる試行する文体—カジュアルな日本語を目指す際の留意点について—

齋藤智美（早稲田大学）

SNS による書くコミュニケーションは日常生活の一部となっており、日本語学習者もまた、SNS を使うための日本語を学びたいと考えている。やりとりの際に配慮すべき事柄は、分かりやすさ・ふさわしさ・正確さ・敬意と親しさなどがあるが、ここでは文体について考えたい。日本語教育の文脈では、文体は丁寧体か普通体と区分され、丁寧度や書き言葉か話し言葉かという面で捉えられる。しかし、SNS でカジュアルな日本語といったものを使ってコミュニケーションをしようとした時、既習の普通体の概念だけでは位相の面での配慮が足りず、パーソナリティーと乖離した調子になる様子が散見される。その点について、実例を示しながら、留意点について考察する。

33. 交流型短期プログラムにおける学習者の日本語発話力の変化—談話技能の観点から—

古田島聰美（YMCA 健康福祉専門学校）・武田知子（国際基督教大学）島崎英香（恵泉女子学園大学）・井口祐子（恵泉女子学園大学）

近年短期留学生の増加に伴い、多様なプログラムが実施されている。本発表は、短期留学生が日本語母語話者と交流し日本語を学ぶ、2週間の交流型短期プログラムにおける学習者の日本語発話力の変化を談話技能の観点から探るものである。本研究では初級から上級までの4レベルで、各クラスでプレイスメントテストのインタビューの点数が最も低かった学生4名を対象とした。研究方法として、中井ら（2004）の談話機能の項目に従い分析を行った結果、「話題に対する自分の態度を示す技能」や「コミュニケーション上の問題を処理する能力」に変化が見られ、日本語母語話者と密に接したことで学習者の談話技能のバリエーションが増えたことが伺われた。

34. 日本語読解力を測る就職筆記テストの検証—難易度及び学習効果に注目して—

金晶晶（神戸大学大学院生）

就職活動をしている留学生にとって、筆記試験は採用プロセスの中で大きな分岐点となる。しかし、就職採用筆記試験は日本人向けの試験であり、留学生にとって非常に難しい。特に非言語能力の問題は数学問題ではあるが、留学生にとって日本語読解力を測られる問題にもなる。そのため、日本語能力がどの程度関わっているかを明らかにする必要があると考えた。本稿ではその第一歩として、日本語版の元々の数学問題と、筆者が作成した中国版の数学問題を用いて、中国人学生を対象に模擬試験調査を行い、その結果を報告する。そのうえで、日中両言語版の問題の難易度が同じであるかどうか、問題の出現順序が学習効果をもたらすかどうかを検証する。

35. 音象徴性に基づく「笑い」に関する擬音語の日中対照研究

夏逸慧（東北大学大学院生）

本研究は日本語と中国語における「笑い」に関する擬音語の音象徴性をよりよく理解させるために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『現代中国語コーパス』から取り上げた「笑い」に関する擬音語を研究の対象とし、次の課題を設定した。①「笑い」に関する一音節語基タイプ型と二音節語基タイプ型の音象徴的な特徴を検討する。②男性と女性の笑い方を表す擬音語の使用傾向を明らかにする。その結果、日本語には男性的な笑い方として有声子音を持つ擬音語が使われ、女性的な笑い方として母音/u/, /o/を持つ擬音語が多く使用されるが、母音/i//o/を持つ中国語の擬音語の使用頻度が高く、女性の可愛い笑い方を注目して描写する傾向が見られる。

36. 日本語多読支援者は多読のルールをどう考えているのか

高橋亘（神田外語大学留学生別科）

近年、日本語多読の現場では、1)やさしいレベルから読む、2)辞書を引かないで読む、3)わからないところは飛ばして読む、4)進まなくなったら他の本を読む、という多読の4つのルールが広く利用されている。本研究の目的は、教師やボランティア等の日本語多読支援者が、これらのルールに対してどのような意識を持っているのかの実態を明らかにすることである。まず、国内外の支援者に対する質問紙調査結果から、ルールに対する意識の全体的傾向を捉える。また、実際に支援者が各々の機関の学習者に合わせ、どのようにルールを適用しているかについて報告する。以上のことから、支援者の視点から見た多読のルールについて考察し、教育的示唆を行う。

37. 初級日本語学習アプリのための練習問題の開発と拡充

黒田史彦（首都大学東京）

オリジナル総合教科書をベースとした初級日本語学習用アプリを開発した。スマホなどのモバイル端末上で稼働し、音声付きの「会話」、英訳付きの「新しい言葉」と「文法解説」に加え、理解・定着をセルフ・チェックするための「練習問題」から構成されている。練習問題は、モバイル端末ならではのタッチスクリーン機能や音声入力機能などを活かしている。本発表では、聴衆の方にアプリを紹介し、実際に使用していただいた上で、コメントやご意見をいただきたいと考えている。特に、今後、練習問題を追加・拡充していくにあたり、幅広く意見交換ができるることを期待している。

38. レポート・論文等における問い合わせ方と「質問づくり」の手法

木林理恵（宇都宮大学）

日本語・日本文化研修生に対して、各自の研修論文作成に役立てることを目的に「質問づくり」（ロスティン&サンタナ 2015）の活動を行った。論文や研究計画書等を書く際に問い合わせ（リサーチ・クエスチョン）をどのように立てるかは様々な文献で具体的な方法が示されているが、多くの場合、単独で作業することが想定されている。問い合わせを立てるという観点から従来の文献と「質問づくり」の手法を比較し、複数人で多様な質問を作成する過程が研修論文の問い合わせにどう影響したかを報告する。

39. 言語聴覚療法を用いたミャンマー人学習者に対する日本語発音トレーニング

ピヨーピィーソン（東京外国语大学日本語・日本文化研究留学生）・伊達宏子（東京外国语大学）

言語聴覚士が日本語母語話者の機能性構音障害に対して行う発音訓練を、日本語非母語話者に適応し、発音の向上を試みた。訓練実施者はビルマ語話者の日本語・日本文化研究留学生と、日本語母語話者教師の2人で、訓練参加者は19~21歳、日本語学習歴1年~4年、日本滞在年数4~5か月のミャンマー人留学生5名である。まず、参加者の苦手な音について質問紙調査を行い、その後、1人ずつ対面で問診、構音検査を行い、4回のグループ訓練を実施した。訓練目標は、「アン・エン」系列の音、「ス・ツ」が正しく聞き分けられ、発音し分けられることであった。訓練は、言語聴覚療法に従って段階的に行い、最終的な検査で発音の向上が認められた。

【会場案内】

福島大学

<https://www.fukushima-u.ac.jp/access/>



電車【東京方面より】

「東京駅」より東北新幹線にて「福島駅」下車 (所要時間約 1 時間 40 分)

「福島駅」より JR 東北本線「金谷川駅」下車 徒歩 10 分

福島駅から 2 つ目 (所要時間約 10 分)

福島駅 08:12→金谷川駅 08:22

福島駅 08:40→金谷川駅 08:50

福島駅 09:37→金谷川駅 09:47

福島駅 10:28→金谷川駅 10:37

郡山駅から 8 つ目 (所要時間 40 分)

郡山駅 07:35→金谷川駅 08:14

郡山駅 08:39→金谷川駅 09:14

郡山駅 09:25→金谷川駅 10:00

郡山駅 10:08→金谷川駅 10:43

電車【仙台方面より】

「仙台駅」より東北新幹線にて「福島駅」下車 (所要時間約 25 分)

「福島駅」より JR 東北本線「金谷川駅」下車 徒歩 10 分

福島駅から 2 つ目 (所要時間約 10 分)

郡山駅から 8 つ目 (所要時間 40 分)

バス

「福島駅東口」5 番ポールから「医大経由二本松行き」に乗車「福島大学」下車 (所要時間約 30 分)
(時刻表) <https://busget.fukushima-koutu.co.jp/fromto/result/2/4092/?week=2>

【昼食について】

今回も午前のポスター発表終了後、大学交流会館にて昼食交流会を行います。ぜひご参加下さい。先着 80名となりますので、お早めにお申し込み下さい。申込は当日受付にてお願いします。

会費は 1000 円です。昼食をとりながら、参加者のみなさんと自由に楽しく交流しましょう。

金谷川駅前にコンビニエンスストアがありますが、それ以外、大学周辺に店はありません。また、当日大学食堂は営業していません。

【会費納入のお願い】

JLEM では 4 月から翌年 3 月までを会計年度としております。2019 年度会費 (3,000 円) 未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#jlem-sg.org (#は@です)まで e-mail にてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店 (ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通 (または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会